

求婚を拒絶する女たち

— マライア・フルアート、イーダ・ロセメリ、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル —

鈴木 美津子

ロマン主義時代の英国小説には、社会的地位の高い男性からの求婚を毅然として撥ねつける女性がしばしば登場する。例えば、ロバート・ベイジ (Robert Bage, 1728-1801) の『ハームスプロング、またはあらぬがままの人』(*Hernsprong, or; Man as He Is Not*, 1796、以下『ハームスプロング』と略記) に登場するマライア・フルアート (Maria Fluart)、シドニー・オーエンソン (Sydney Owenson, 1783-1859) の『女性、またはアテネのイーダ』(*Woman; or, Ida of Athens*, 1809 以下、『アテネのイーダ』と略記) のイーダ・ロセメリ¹ (Ida Rosemeli)、ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813) のエリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) など。求婚の場面がきわめて興味深いのは、求婚という個人的な空間が、政治、国家、宗教などに関する「思想の戦い」(the war of ideas) を丁々発止と行う公共の空間に突然変容するからである。主人公が求婚を拒絶するとき、いわば比喩的に、求婚者が体現する民族、国家、階級、政治信条、社会体制などが拒絶されることになる。いかなる理念、信条、体制が拒絶されることになるのかということは、作品のテーマ、作品に潜む政治的メッセージと関係してくる。ロマン主義時代の小説家、特に女性作家は、小説という媒介を自己の抱く政治的・宗教的・社会的信条を発信、表明する場として利用してきたのである。

本論では、ロマン主義時代の小説に頻出する「求婚を拒絶する女たち」のモチーフを持つ作品群に潜む政治的、社会的意図を探りつつ、このモチーフがエリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の『北と南』(*North and South*, 1855) のマーガレット・ヘイル (Margaret Hale) の求婚拒絶の場面に、いかに継承されているのかを検証してみたい。

1 嬉々として承諾する女—エヴェリーナ・アンヴィル

最初に、ロマン主義時代の小説群に拒絶する女たちが登場するきっかけを作ったフランシス・バーニー (Frances Burney, 1752-1840) の風俗小説・教養小説『エヴェリーナ、または若い女性が世の中に出る物語』(Evelina, or: The History of a Young Lady's Entrance into the World, 1778、以下『エヴェリーナ』と略記) を見てみたい。求婚を拒絶する女性を主人公に据えた小説は、『エヴェリーナ』に対する反発、反論として書かれたものが多いからである。

バーニーは、時の国王ジョージ三世 (George III, 1738-1820) の后シャーロット王妃 (Queen Charlotte Sophia, 1744-1818) の女官として5年間仕え、父親のバーニー博士 (Dr. Charles Burney, 1726-1814) 譲りのトーリー党支持者である。当時の野党ホイッグ党が仕掛けた初代インド総督ウォレン・ヘースティングズ (Warren Hastings, 1732-1818) の弾劾裁判 (1788-95) においても、王妃の命を受けて裁判を傍聴し、裁判の様子を日記に克明に記した。さらには、トーリー党支持者の立場で、ヘースティングズと東インド会社を暗に擁護した風俗喜劇『忙しい一日——あるいは、インドからの到来者』(A Busy Day; or, An Arrival from India, 1800) を執筆し、ヘースティングズの名誉挽回をはかった。

『エヴェリーナ』は、主人公エヴェリーナ・アンヴィル (Evelina Anville) が育ての親のヴィラーズ牧師 (Rev. Villars) に宛てた書簡という体裁を取る。「若い女性が世の中に出る物語」という副題が示すように、地方から出てきた若くて無邪気で純真なエヴェリーナがロンドンの社交界で、世間のしきたりや社交上の慣習、作法に疎いために様々な困難に遭遇し、失敗や挫折を重ねながら精神的に成長し、最後には眉目秀麗で非の打ち所のない名門貴族オーヴィル卿 (Lord Orville) から求婚され、嬉々として承諾するという物語である。

オーヴィル卿は、初めてエヴェリーナに会ったとき、彼女の印象を「哀れで弱々しいお嬢さん」(E 28)² と知人に語る。この言葉に、彼女はひどく傷つくが、それでも彼を密かに慕うようになる。紆余曲折を経て最後に、オーヴィル卿がエヴェリーナに求婚すると、彼女はからかわれていると誤解する。「あなた様は私を馬鹿にするような残酷なお方ではございませんわよね」(E 290) と言う。すると、オーヴィル卿は「馬鹿にする、とおっしゃるのですか。いや、あなたを敬っております！誰よりも僕はあなたを尊敬し、敬服しております！……あなたは、女性の中

でもっとも優しく、もっとも完璧です。そしてあなたは僕にとって筆舌に尽くしがたいほど愛しい存在なのです」(E 290)と言いつつ。エヴェリーナは嬉しさのあまり気を失わんばかりになる。オーヴィル卿に最大級の褒め言葉でもって求婚されたエヴェリーナは、「オーヴィル卿に愛され、彼の気高い心によって光栄にも伴侶に選ばれるという、この私の幸せはあまりにも大きなものでしたので、とても耐えられませんでした。私は泣きました。私を圧倒するような激しい喜びで号泣しました」(E 292)とヴィラーズ牧師に書き送る。しかし、過度に謙虚なエヴェリーナは、熟慮した結果、身分違いを理由に身を引こうとする。すると、オーヴィル卿は、「僕の心はあなたのものです。そして、あなたに永遠の愛を誓います！」(E 305)と叫ぶ。かくして、エヴェリーナはオーヴィル卿の求婚を感謝の念でいっぱいになり、涙ながらに受け入れる。このエヴェリーナの姿は、当時の因習的な女性観を展開する作法書 (conduct book) で推奨されている女性像そのものである。一例を挙げれば、グレゴリー博士 (Dr. John Gregory, 1724-73) は、作法書『父からの娘たちへの遺贈』(*A Father's Legacy to His Daughters*, 1774) において、男性に依存し、無知で、内気で、受動的で、謙遜で、慎ましやかなことが女性のもっとも望ましい属性であると主張しているのである (Gregory 37, 39)。ちなみに、メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97) は、『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792) において、グレゴリー博士の作法書は女性に虚偽的、作為的であれと勧めているとして、手厳しく批判している (Wollstonecraft 199-200)。

バーニーは、エヴェリーナに、当時の家父長制社会、貴族階級を体現する完璧な男性オーヴィル卿の求婚を恭しく受け入れさせることによって、いかなる政治的なメッセージを発しているのか。少なくとも『ヴェリーナ』執筆時点では、バーニーが、階級制度、社会における因習的な女性の役割を尊重し、グレゴリー博士の望ましい女性像を高く評価していることは明らかである。『ヴェリーナ』に潜む政治的メッセージは、当時の家父長制社会、階級制度、政治体制を尊重し、できるだけ現体制維持することに努力すべきであるというものであろう。「執筆時点では」と限定したのは、後にバーニーの考えは変化するからである³。

貴族階級、家父長制社会、女性の置かれている状況などに些かの疑問も抱かず、素直に受け入れ、過度に謙遜で内気で受動的で男性に依存するエヴェリーナの

姿に、愚かしさ、ばかばかしさ、滑稽さ、不満、反発、反感を感じる小説家たちが出てくる。かくして、毅然として求婚を拒絶する女が小説に登場する。

2 拒絶する女—マライア・フルアート

ベイジは、製紙業を営んでいたが、ダービー哲学協会 (Derby Philosophical Society) やバーミンガムのルーナー協会 (Lunar Society) の会員と親交を深め、50歳を過ぎてから政治的メッセージを忍ばせた小説を匿名で書き始める。ベイジは、非英国国教徒でホイッグ党支持者であり、晩年には急進主義者のウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) などとも親しく交際している。

急進主義小説『ハームスプロング』の主人公ハームスプロング (Hermesprung) は、アメリカ生まれで素性は定かではないが (後に判明)、虚飾にとらわれない率直な青年。トマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) の『人間の権利』 (*The Rights of Man*, 1791-92) を愛読し、階級制度に反対し、困窮している人々に援助の手を差し伸べ、ウルストンクラフトの女子教育論を全面的に支持する。物語はハームスプロングと父親に圧制的に支配されている娘キャロライン (Caroline Capinet) の、一見すると身分違いの恋愛を中心に展開する。

『ハームスプロング』において用いられている文学的戦略は、文学的戯れと体制批判の共存である。『ハームスプロング』は先行する小説などと軽快に戯れながら、その戯れの背後に様々な急進主義的メッセージを潜ませるとい手法、戦略をとる。つまり、様々な文学的常套手段を風刺し揶揄し、貴族、国教会牧師、弁護士などの体制側に属する人々の卑俗性、腐敗堕落ぶりを機知と上質のユーモアや笑いに包んで暴露し、社会慣習、体制を皮肉たっぷりに批判するのである。最後には、攻撃していたはずの文学的常套手段をそのまま利用して、ハッピー・エンドに纏め上げるという、急進主義小説としては意表をつく結末をつける (鈴木, 2007, 127-28)。

キャロラインの親友マライアは、急進主義的信条の持ち主で、きわめて理知的で機知に富んでいる。ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』に言及しながら、社会における女性の役割、女子教育などについて熱く語る (H 213-17)。マライアは、作法書において望ましいとされている女性のまきに対極に位置すると言えよう。先に挙げた作法書『父からの娘達への遺贈』において、グレゴリー博士

は、女性に知性は不要と断言し、女性の才気はしばしば「自己陶酔的で、自制心を失いがちで……もっとも危険な才能」(Gregory 41-42)であると批判しているからである。

マライアは、キャロラインの父で60歳のグロンデイル卿 (Lord Grondale) に求婚され、突然キスを求められる。「キスですって！何ということでしょう。……あなたの飛びかかりようからして、てつきり服でもはぎ取って私を陵辱したいのかと思いましたわ」(H 110-11)と機知に飛んだ返答する。さすがのグロンデイル卿も笑いだし、誘惑の手を一時緩める。しかし、不遜で傲慢で好色なグロンデイル卿は、自分の社会的地位をもってすれば、マライアはいずれ求婚に応じるだろうと尊大にも考え、執拗に求婚を続ける。「フルアートさん、もしわしの地位、貴族の肩書き、人格、そして財産をあなたの足もとに投げ出すと申し出たなら、あなたは求婚を真剣に考慮する価値ありとお思いになるのだろうか」(H 185)。彼女は取り澄まして「あら、グロンデイル卿、もちろん、そういったものは非常に重要なものですわ。そのいくつかを踏みつぶしたくなりますもの。それに、実際、グロンデイル卿、私があなたの性急なお申し込みをお受けしたら、あなたはあまりにも多くの物を失うことになりますわよ」(H 185)と、社会的地位、貴族の肩書き、財産などは踏みつぶしても当然の取るに足らない物、と指摘する。さらに、彼の結婚の申し出を承諾すれば彼が失う物は多々ある、とユーモアたっぷりに脅かし、求婚を拒絶する。グロンデイル卿はそれでも納得せず「貴女はグロンデイル令夫人にならなければいけませんぞ」(H 186)と重ねて言うと、「私にはその必要性は感じられませんわ」とマライア。するとグロンデイル卿は「わしは必要性を感じるのだ」と返答。それに対してマライアは「じっくりと考える必要がありますわね。私の脳が耐えられないほど考える必要がありますわ。ですからお気をつけ遊ばせ、グロンデイル卿。……それに、ストーン夫人はなんとおっしゃるかしら」(H 187)と、グロンデイル卿の屋敷の家政婦長にして彼の長年の愛人でもあるストーン夫人 (Mrs Stone) に言及して、グロンデイル卿の欺瞞、虚偽を指摘し、求婚を断固として撥ね付ける。

小説の最後では、マライアは、「まだ自分自身に夫を購入する気にはなれないわ」(H338)と茶目つけたつぷりに言い放ち、「小さな家を構えて」(H338)一人で快適に暮す生き方を選択する。このマライアの生き方は、女性は結婚してこそ幸せ

なのだという、当時の家父長制社会の暗黙の思い込み、因習的な女性観に対する痛烈な批判となっている。澆刺として機知に富んだ自立した女性マライアが拒絶したものは、グロンデル卿が体現する貴族階級、家父長制社会である。作品に潜む政治的な意図は、貴族階級の卑俗さ、腐敗墮落を告発することであり、家父長制社会の因習的な女性観を露わにすることであろう。貴族で、年長者で、家父長制社会の権化のような男性の求婚を中産階級の若き女性が鮮やかに退けるこのエピソードは、当時の急進主義小説の中でも、ひとときわ光彩を放っていると言えよう。

3 拒絶する女—イーダ・ロセメリ

オーエンソンは、当時最も成功した女性の職業作家の一人である。政治的には筋金いりのホイッグ党支持者であり、旧教徒解放を支持し、アイルランドの独立運動を積極的に支援し、イタリアやギリシアの独立運動にも共感を抱いていた。現実においても小説においても、帝国と植民地の力関係を執拗に追求した作家である。

国民小説『アテネのイーダ』は全4巻からなり、描かれている時代は1780年から88年までのおよそ8年間。ギリシア暴動(1770)、露土戦争(1768-74, 1787-92)を歴史的な背景としてもつ。この作品は、ギリシア人の父親とイギリス人の母親を持つ、知的で感受性豊かな女性イーダと彼女に魅了される三人の男性の関係を巡って展開していく。三人の男性とは、傲慢で世慣れた放蕩者のイギリス人貴族B卿(Lord B)、ギリシア人で元奴隷の革命の闘士オスマン(Osmyn)、そしてオスマン帝国の好色で残虐なアヘメト帝国軍司令官(Ahemet)である。

B卿がイーダに求婚するのは、第1巻と第4巻である。第1巻の舞台はアテネ、時代は1788年頃。イギリス人旅行者のB卿が、イスラムの二大祭りの一つ、大祭(Greater Bairam)の初日にアテネを訪れるところから物語は始まる。B卿の目から見た、オスマン帝国の植民地支配下にあるギリシアの姿が活写される。B卿は、異国的な魅力に溢れる美貌のイーダを垣間見て虜になり、大英帝国の貴族らしい傲慢さで、彼女を愛人にしようとする。B卿は、イーダに初めて愛を告白する際に、「[君は]僕の習慣を覆し、僕の利害関係には危険であり、僕の義務に反しているのだ」(I1:183)と、いかにも恩着せがましく弁解しながら、愛人になつ

てくれと頼む。イーダは、B 卿の愛の告白に対して、「ああ！だめです……永遠にあなたの友人であります。アテネのイーダはあなたの妻になることは決してありません」(I 1:193) と拒絶する。

第 4 巻の舞台はロンドン。イーダはイギリスに亡命し、B 卿と再会する。B 卿はイーダに正妻になってほしいと求婚する (I 4: 244)。それに対してイーダは、「私はあなたのものになることは決してありません。……他の方を愛しているからなのでございます。愛情が報われるという希望はないのですが、私はその方を愛しております」(I 4: 247) と言って、求婚を断る。「その方」とは、ギリシア人のオスミンのことである。B 卿はオスミンに対するイーダの思いを叶えるために、義侠心を發揮して二人の仲を取り持つ。イーダとオスミンは結婚し、ロシアの地で祖国ギリシアの独立運動に打ち込む、という所で物語は終わる。

ギリシア文明を体現するイーダは、大英帝国を体現する B 卿から、一度目は愛人として二度目は正妻として求められる。オーエンソンが、イーダに B 卿を二度にわたって拒絶させ、ギリシア人オスミンの求婚を受け入れさせたのは、政治的な意図があつてのことである。当時、ギリシアは独立達成のために英国を含めた他国の援助を当てにしていた。オーエンソンはそのことを懸念し、ギリシアがオスマン帝国から独立するためには、英国などの援助に頼らず当事者であるギリシア人自身が立ち上がり、自力で独立運動を行わなければ達成は難しい、ということを警告しているのである。さらには、ギリシア（オスマン帝国の植民地支配下にある）をアイルランド（大英帝国の植民地支配下にある）に、オスマン帝国をイギリスに、ロシア（ギリシアを援助）をフランス（アイルランドを援助）に置き換えるとき、その意図はより鮮明になる。オーエンソンは、『アテネのイーダ』において、オスマン帝国によるギリシアの植民地支配の非道さを描きながら、間接的にアイルランドにおけるイギリスの植民地政策の不正義、不当さ、非道さを仄めかし、アイルランドの独立達成を強く希求しているのである。

4 拒絶する女—エリザベス・ベネット

『高慢と偏見』の美しく知的で澁刺とした主人公エリザベスは、「反エヴェリーナ」、「反セシリア」として設定されている (Moler 97-98; Butler 198-99)。エリザベスは、繊細で内気、謙虚で控えめなエヴェリーナやセシリア (Cecilia) とはまさ

に正反対の行動を取り、バーニーの女主人公達のパロディ的側面を持つ。エリザベスは既成概念にとらわれず、「元氣よく走ったり」(P 53)、ペチコートに泥だらけにしながらぬかる道を一人歩いて姉の見舞いに出かけたり、不遜な態度を取るダーシー氏 (Mr Darcy) に対して機知に富んだ応酬をして、からかったり、急進主義的発言をおこなったりする。このエリザベスの姿は、まさしく『ハームスプロング』のマライアを想起させる⁴ (Knox-Shaw 100)。

『高慢と偏見』のエリザベスがもっとも輝いて見えるのは、マライアと同様、拒絶の場面であろう。エリザベスは、最初は父親ベネット氏 (Mr Bennet) の推定相続人である英国国教会の牧師コリンズ氏 (Mr Collins)、次は大地主のダーシー氏、そして最後に貴族階級出身のレディ・キャサリン・ド・バーグ (Lady Catherine de Burgh) の要求を拒絶する。コリンズ氏は女性に保守的な教訓を与えるジェイムズ・フォードイス (James Fordyce, 1720-96) の『若き女性のための説教集』(Sermons to Young Women, 1765) を愛読し、きわめて因習的な女性観を抱いており、女性は求婚されたら喜んで飛びつくだらうと思っている。『若き女性のための説教集』は、グレゴリー博士の『娘達への父による贈り物』と同様、ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』において酷評されている (Wollstonecraft 191-96)。コリンズ氏は、『エヴェリーナ』に登場するスミス氏 (Mr Smith)、そして『ハームスプロング』のサー・フィリップ・チェストラム (Sir Philip Chestrum) など「自惚れた青年の求婚」の系譜に連なる人物である (Moler 96; Butler 83)。

エリザベスはコリンズ氏に求婚され、「お断りする以外いたしようもございません」(P 107) ときっぱりと断るが、自信満々の思い上がったコリンズ氏は本気にしない。そこでエリザベスは再び「私は本気で断りしているのでございます」(P 107) と言う。すると、コリンズ氏は「求婚を最初の申し込みでは拒絶するというのがあなたがた女性の習慣であると存じております……優雅な女性の常套手段にしたがって気をもたせて愛情を募らせんとするものにほかならぬと考えたいのであります」(P 108-09) と言いつのる。かくして、エリザベスは「お受けすることはまったく不可能なのです……私を優雅な女などとは思わずに、心から真実を申し上げている理性あるものとお考えください」(P 109) と断固として拒絶する。この拒絶の言葉は、「女性の優雅さを誉めそやしたり……する代わりに、女性を理性的存在として」(Wollstonecraft 81) 考えるべきである、というウルストンクラ

フトの『女性の権利の擁護』を想起させる。ここに、当時の男性に都合の良い因習的な女性観に対するエリザベスの憤り、不満が示唆されている。

ダーシー氏の最初の求婚は、先に見たオーヴィル卿のエヴェリーナへの仰々しい求婚のパロディになっている (Moler 82)。ダーシー氏は、両家の家柄の相違、ベネット家とその親戚の階級の低さを赤裸々に指摘し、「自分の意志に逆らい、理性に逆らい、自分の人柄にさえも逆らって」(P 192)、エリザベスを愛すると言う。彼の言葉は、『アテネのイーダ』のB卿が愛の告白の冒頭に用いた言葉と酷似している。エリザベスは、エヴェリーナとは違って、ダーシー氏の求婚を恭しく受け入れたりはしない。「お知り合いの最初から……あなたの態度は傲慢で自惚れの強い、他人の感情を傷つけて平気な方という印象をはっきりときざみつけ、そのうえ続いて起こった事件ですっかりあなたを嫌いになってしまいました……絶対結婚する気にならない方だと思いました」(P 193) と、彼の横柄さ、過度の自尊心、高慢さを指摘し、彼の求婚をきっぱりと拒絶する。

家名に過度の誇りを抱き、傲岸で頑迷、偏狭なレディ・キャサリンは、甥のダーシー氏が「家柄の悪い、有力な親戚もない、財産もない若い成り上がり娘」(P 356) エリザベスと結婚することは、ダーシー家の品位を貶めることであり、「名誉、礼儀、分別、いや利害関係がこの結婚を禁じているのですよ」(P 356) と述べ、エリザベスに甥との結婚を思い留まるようにと要求する。すると、エリザベスは、「彼は紳士ですが、私も紳士の娘です。その点平等です」、「私の事件に干渉なさいます権利はまったくおありになりません。この問題についてこれ以上悩まさないでいただきたいと存じます」(P 356)、「義務も名誉も感謝もこの場合何の関係もないことごとくごさいます。私がダーシーさまと結婚したからといって何一つ損なわれる道義はごさいます」(P 356-58) と、彼女の要求を毅然として退ける。

エリザベスは、保守主義の論客エドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) の鍵語である義務、名誉、感謝、道義を決然と否定し、急進主義者ゴドウィンの用語である平等、権利、干渉を用いて反論する。結局、エリザベスは、中産階級を体現する英国国教会の牧師そして貴族階級を体現する大地主や令夫人の求婚・要求を毅然として拒絶し、彼らの傲慢さ、蒙昧さ、頑迷さ、偏狭さ、俗物性を暴き出す。かくして、エリザベスの急進性は拒絶の場面でひとときわ際立つのである。

5 拒絶する女—マーガレット・ヘイル

『北と南』に描かれている求婚拒絶の構図は、基本的にはオーエンソンの『アテネのイーダ』とオースティンの『高慢の偏見』のそれを継承している⁵。マーガレットが弁護士ヘンリー・レノックス (Henry Lennox) に求婚されるのは、北の産業都市ミルトンに引っ越そうとしている時である。マーガレットは、イーダがB卿を断った時のように「友人」という言葉を連発して、「びっくりいたしました。……私はあなたのことをいつもお友達とっておりました。お願いですわ、あなたのことをずっとお友達だと思っていきたいのです」(N 29)、と言って彼の求婚を断る。レノックスは、断られても「いずれ僕のことを恋人として考えてほしいのだが」(N 29)と、『高慢と偏見』のコリンズ氏のように、未練がましく懇願する。マーガレットは、1、2分沈黙した後、次のように答える。「私はあなたのことをお友達としか考えたことはありません。私はあなたのことをお友達と思いたいんです。あなたのことをどうしても友人以外のものとは考えられません」(N 29)。マーガレットは、「ヘンリーの求婚を断ったときの痛みにかすかな軽蔑が混じり合う」(N 30)のを感じ、「彼女の美しい唇がかすかに軽蔑の念でゆがむ」(N 30)。一方、レノックスの方は『高慢と偏見』のコリンズ牧師と同様、彼女の拒絶の言葉を額面通りには受け取らない。それどころか「僕は彼女が信じているほど彼女に対して無関心ではない。希望を失わないようにしましょう」(N 30)と決意する。レノックスはコリンズ師同様、まさしく「自惚れた求婚者」の系譜に連なる人物と言えよう。マーガレットがレノックスに多少の軽蔑の念を抱くのは、彼があまりにも自惚れ、自己満足しており、現実認識が甘いからであろう。レノックスはマーガレットより15歳ほど年長で、中産階級出身の弁護士。おそらく、スコットランド国教会の長老派に属しており、いわゆる体制側の人間である。マーガレットの求婚の拒絶は、レノックスが体現する豊かで安定した中産階級の生活、価値観に対する彼女の拒絶を意味する。

ジョン・ソートン (John Thornton) は、マーガレットに「男性が女性をかつてこれほど愛したことはないほど愛している人」(N 195)と、情熱的に呼びかけ、求婚する。「あなたの話し方は衝撃的です。失礼ですわ。失礼だというのが、私が最初に感じたことだとしても仕方ありません。……あなたの態度は不愉快です」(N 195)と、彼女は求婚を断る。実は、彼女はこの時点で、すでに無意識の

うちにソートンに惹き付けられているのだが、「衝撃的」、「礼を失する」、「不愉快」という言葉を用いて彼の求婚を退け、続けて紳士であれば暴動の際に助けてもらったことを愛情の表れなどと誤解はしないはず、と指摘する。すると、ソートンはペインの『人間の権利』を想起させる「人間」(man)と「権利」(right)という言葉を用いて反撃する。「そのようにして助けられた紳士はほっとしてありがたいと言うことを禁じられているのですね……僕は人間だ。自分の気持ちを表現する権利があります」(N 195)。自分は、中産階級のしがらみや作法にがんじがらめになっている「紳士」ではない、「人間だ」と主張し、人間には自分の気持ちを率直に表現する権利がある、と言い放つ。二人はかつてソートン家で開催された晩餐会で紳士の概念を巡って議論しており、ソートンはそのことを念頭に置いて発言している。『高慢と偏見』のエリザベスがコリンズ氏の執拗な求婚を拒絶する際に、ウルストンクラフトを想起させる言葉を用いて家父長制社会を批判したように、『北と南』においてはソートンが、ペインの『人間の権利』を思い起こさせる用語を用いて、マーガレットの抱く紳士概念、階級的偏見、ひいては英国の階級制度を批判する。ソートンの反駁は、図らずも彼の急進性を浮き彫りにする。

ソートンの二回目の求婚は、レノックスに助けられる。彼は、マーガレットがソートンに対する熱い思いを胸に秘めていることに気づき、二人だけで語り合える場を設けてやる。マーガレットとソートンは互いの気持ちを確かめ合い、かくして、ソートンの二回目の求婚は受け入れられる。レノックスの恋の仲立ち者は、『アテネのイーダ』のB卿のそれを想起させる。

マーガレットとソートンの結婚は、国民小説に頻出する民族・階級・文化・宗教の異なる者同士の結婚でもある(鈴木 2010, 348, 352-53)。マーガレットは、イングランド南部出身、英国国教徒、中産階級に属する。ソートンは、北部出身、非英国国教徒、出自は労働者階級である。マーガレットは、中産階級を体現するレノックスを拒絶し、非英国国教徒、共和主義者、産業資本家のソートンとの結婚を承諾する。この結婚に、作品に潜む政治的なメッセージが示唆されている。ギヤスケルは、進歩や社会変化に価値を置くホイッグ的歴史観を抱き、ユニテリアンとして英国国教会の持つ政治的・宗教的特権に対して批判的だった。ギヤスケルは、マーガレットに、政治的、階級的、宗教的にほとんど同質のレノッ

クスではなく、ことごとく異なるソートンンを伴侶として選択させることにより、真に望ましい英国社会は、政治的、宗教的、民族的に多様な価値が共存する社会であることを示そうとした。ギヤスケルは、「求婚を拒絶する女」のモチーフを、彼女の政治的・宗教的立場に合うように修正を施し、『北と南』の構成やプロット展開に巧みに利用したと言えよう。

注

本稿は、日本ギヤスケル協会第31回大会（2019年10月5日、於実践女子大学渋谷キャンパス）における講演「拒絶する女たち——マライア・フルアート、イーダ・ロセメリ、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル」に加筆修正を施したものである。

- 1 Idaの発音は、英語読みであればアイダであるが、ギリシア人なので「イーダ」、または「イダ」であろうと推測される。本論では「イーダ」と表記することにする。
- 2 以下、『エヴェリーナ』はE、『アテネのイーダ』はI、『ハームスブロング』はH、『高慢と偏見』はP、『北と南』はN、『セシリア』はCと略記し、出典は括弧内に算用数字で頁数を示す。
- 3 バーニーの最後の作品『さまよえる女、または女性の困難』(*The Wanderer; or, Female Difficulties*, 1814)には、幾つもの職業を転々としながら真摯に生き抜いていくジュリエット・グランヴィル (Juliet Granville) やウルストンクラフトの政治思想やフランス革命に共感し女性の権利を声高に叫ぶエリナー・ジョドレル (Elinor Joddrel) が登場する。バーニーの家父長制社会に対する信頼の揺らぎが窺われる。
- 4 バーニーの『セシリア』に「高慢と偏見」という言葉が3回用いられている (C 930) ことはよく知られているが、『ハームスブロング』にも「高慢と偏見」という言葉が何度か繰り返し使用されている (H 170, 173-74)。『ハームスブロング』と『高慢と偏見』の影響関係については、拙論『『ハームスブロング』から学んだもの』、参照。
- 5 ギヤスケルが、オースティン、バーニー、そしてサー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott, 1771-1832) の作品を読んでいたことは確かである (Rubenius 317; Uglow17) が、ページとオーエンソンの作品を読んでいたことを示す書簡の記載などは見当たらない。ともあれ、ページとオーエンソンの作品は、スコットやオースティンの小説に強い影響

を与えており、ギヤスケルがたとえベイジとオーエンソンの作品を読んでいなくても、スコットやオースティンの作品を通じて間接的に影響を受けた可能性はある。

引用文献

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. *The Oxford Illustrated Jane Austen*. Ed. R.W. Chapman. 1813. Oxford: Oxford UP, 1967.
- Bage, Robert. *Hermesprung; or, Man as He Is Not. A Novel*. Ed. Pamela Perkins. 1796. Peterborough: Broadview P, 2002.
- Burney, Frances. *Evelina, or, The History of a Young Lady's Entrance into the World*. Ed. Stewart J. Cooke. 1778. New York: W. W. Norton, 1998.
- . *Cecilia, or Memoirs of an Heiress*. Ed. Peter Sabor and Margaret Anne Doody. 1782. Oxford and New York: Oxford UP, 1988.
- Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*. Oxford: Oxford UP, 1975.
- Campbell, Mary. *Lady Morgan: The Life and Times of Sydney Owenson*. London: Pandora P, 1988.
- Doody, Margaret Anne. *Frances Burney: The Life in the Works*. New Brunswick: Rutgers UP, 1988.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South. The Works of Elizabeth Gaskell*. Ed. Joanne Shattock, et al. 10 vols. 1855. London: Pickering & Chatto, 2005-06.
- Gregory, John. *A Father's Legacy to His Daughters*, 1774. London, 1795.
- Knox-Shaw, Peter. *Jane Austen and the Enlightenment*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Moler, Kenneth. *Jane Austen's Art of Allusion*. Lincoln: U of Nebraska P, 1977.
- Rubenius, Aina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works. In Essays and Studies on English Language and Literature*, V. Ed. S. B. Liljegren. The English Institute in the U of Uppsala, 1950.
- Owenson, Sydney. *Woman: or, Ida of Athens*. 4 vols. London, 1809.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman*. Ed. Miriam Kramnick. 1792. Harmondsworth: Penguin, 1975.
- 鈴木美津子 「『ハームスブロング』から学んだもの—文学的戯れと体制批判」, 内田能嗣・塩谷清人編著『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』, 世界思想社, 2007. 125-38.

——『北と南』とロマン主義時代の歴史小説』、日本ギヤスケル協会編『エリザベス・ギヤスケルと英国文学の伝統』、大阪教育図書、2010. 347-57.

(東北大学名誉教授)

The Women Who Reject a Marriage Proposal: Maria Fluart, Ida Rosemeli, Elizabeth Bennet, and Margaret Hale

Mitsuko SUZUKI

A woman character who rejects resolutely a marriage proposal by a man of position, often appears in the late eighteenth- and the early nineteenth-centuries novels: Maria Fluart in Robert Bage's *Hermisprong, or, Man as He Is Not* (1796), Ida Rosemeli in Sydney Owenson's *Woman; or, Ida of Athens* (1809), Elizabeth Bennet in Jane Austen's *Pride and Prejudice* (1813) and so on. The proposal scene is particularly interesting and significant because the private sphere where a woman protagonist is asked for her hand by her suitor suddenly transforms itself into the public one where, in Marilyn Butler's words, 'the war of ideas' about race, religion, politics and empire is fought. When she turns down his marriage proposal, it implies she metaphorically refuses race, nations, political and social systems, and religious belief he embodies. Women novelists in the Romantic period express their political, religious, and social ideas through the medium of novels, which provide the site of 'the war of ideas' for the novelists at that time.

The purposes of this essay are twofold. First, I argue what intention lies concealed behind the above-mentioned novels with a motif of 'the woman who rejects a marriage proposal'. Second, I investigate how the scene where Margaret Hale refuses Henry Lennox's and John Thornton's marriage proposal dauntlessly in *North and South* (1855) inherits and follows the motif from the novels in the Romantic age, modifying it to serve Elizabeth Gaskell's own political purpose.